

入選

「命の源の「水」を大切に」

大阪府 大阪教育大学附属池田中学校

二年 山本 麻生

琵琶湖が近く淀川が流れる大阪は、古くから「水の都」と呼ばれ、蛇口を開けば十分に水が出てくる生活を送っている私は、水について意識することが少ない。

そんな私は、たまに大阪へやって来る祖母に、「もっと水を大切にしたいよ。蛇口を開けば安全な水が出るのを当たり前だと思ってる。だらうけど、それはすぐせいたくなことなんだから。」と注意される。

祖母は瀬戸内海の小さな島に住んでいる。小さな島のため、川もなければダムもなく、三十年程前では水道がなく、各家庭が井戸を掘って、井戸水を飲料用はもちろんすべての生活用水として使っていたそうだ。水質検査も不十分で、特に雨の少ない夏には水に塩からさを感じ、湯沸かし器なども塩分でさびが出て傷むのが速かったとのことだった。生水を飲むことは考えられず、いつも一度沸かしてから冷ました水を飲んでいたそうだ。

それでも井戸水が十分にあるうちはまして雨の少ない、瀬戸内地方のため、真夏になると、井戸水が激減するので、苦労したとのことだ。とにかく、徹底的に節水に努めたと聞いた。

歯みがき中に水を出しっぱなしにしない。米のとき汁は花壇や家庭菜園にまく。風呂の残り湯は洗たくに使う。エアコンの室外機から出る水もバケツにためておいて、打ち水に使う。そういうことを祖母は当たり前前に行ってきたのである。

三十年程前、海底にパイプラインが設置され本州から水を送ってもらえるようになり、水道が引かれ、生水を飲めるようになった時本当に感動したそうだ。こうして、祖母も蛇口を開けば、安全な水が出る生活にはなったが、やはり水道のない生活を知っているだけに、水に感謝し大切にすることを常に持ち続けている。

祖母に注意される度に、水の豊かな大阪に住む私も水に対する意識が高まり、水を大切にしようという気持ちが強くなってきた。祖母を見習って、水の出

っ放しなどをしないで、身近なところから節水に心がけるようにしている。また、世界に目を向けてみると、発展途上国のアフリカなどには、一日わずか五リットルの水で生活しなければならぬ地域もある。現在、日本人は工業用水・農業用水・生活用水など全てを含めると一人あたり一日に約二千リットルの水を使っているというのに。

各家庭で節水を心がけるのはもちろん、国全体で水を大切に、使う水を汚さない努力をしていかなければならないと思う。また、発展途上国に水道を引く援助などもさらに進めていくべきだと思う。

「水」は命の源であり、大切な宝物である。十分な水を得ることのできなかった時代の人々のことや、今でも飲み水を手に入れるのにさえ苦労しているような国々の人々のことを考えながら、「水」を大切に使うように思う。

入選

「水の源流地に住む私にできること」

奈良県 山添村立山添中学校

二年 中 暖子

私は、奈良県の北東部、大和高原の中にある、神野山のふもとの村に住んでいます。家の横を、小さな川が流れています。この川はいつたい、どこまで流れているのだろう。私は小さい頃から疑問に思っていました。

小学校四年生の時のことです。私が疑問を抱きながら川を眺めていると、「この川は小さいけど、遠い大阪の海へ流れてるねん。」

と、祖父が教えてくれました。このとき、やつと心の中の疑問が消えました。でも、本当に大阪とつながっているのだろうか、どのようなルートでつながっているのだろうか。私の中で新たな疑問が生まれました。そしてそれを、夏休みの自由研究で調べてみることにしました。まずは、私の家の横を流れている川の原点をたどってみました。ずっと坂道を登っていくと、神野山の山頂近くの弁天池にたどりつきました。山のあちこちから、きれいな湧き水がしみでていました。それらが川の始まりになるのです。それから私の家の横を通り、いくつもの小さな川が集まって、いったん上津ダムに蓄えられます。そして遅瀬川となり、名張川と合流して、木津川・淀川となって大阪湾へ注いでいました。その途中には、ダムや浄水場があり、水が繰り返し使われていることが分かりました。また、きれいな景色や、めずらしい橋、河原を利用したグラウンドなどがあり、川は水を運ぶとともに流域で生活する人々の文化も、支えていることが分かりました。

私の家では、山の湧き水を簡単にろ過したただけの水を、生活用水に使っています。源流地の水を、まず一番に使えるのは私たちです。そんな私たちが水をきたなく汚して、そのまま流してしまうと、どうなるのでしょうか？困ってしまうのは、下流の人々です。大げさに言うと、蛇口をひねったら汚い水がでるようなものです。そんな水、安心して飲むことができますか。例え下流までに浄水場があったとしても、ひどく汚れた水をきれいにするには、たくさん費用がかかります。その費用も税金でまかなわれているので、大きな負担と

なります。

昔は、川で洗濯したり、お風呂や台所で使った汚れた水を、そのまま川へ流していたそうです。でも今は、家庭用浄化そうを設置して、水をきれいにし、川へ流しています。浄化そうの設置や点検には、費用もたくさんかかるけど、流した水をまた利用するためには必要なことだと思います。家で手伝いをするときに、「洗剤を使いすぎるな」とか、「フライパンは油をふきとってから洗え」とか口うるさく言われます。めんどうくさいなあ、と思うけど、きれいな水を下流に届けるためには、注意しなければならぬことです。

水の源流地に住む私にできることは、下流の人々に汚れた水を流さないことです。そのためには、水の使い方に気をつけ、水を大切に使う、きれいな湧き水を出してくれる森林を守るなどだと思います。

これからの生活の中では、常に水の行方に気をつけながら生活していきたいです。

入選

「川を大切に」

和歌山県 近畿大学附属和歌山中学校

一年 坂田 幸久

僕は毎日学校まで自転車です。通学の途中紀の川を渡ります。紀の川は、日本の中でも雨の多いといわれている大台ヶ原を水源に、昔から変わることなく流れています。紀の川を力強く、そして美しく流れる水は、僕たちのくらしをささえ、心にうるおいをあたえてくれます。僕たちは、どんなことに気をつけたらこの美しい川の流れをいつまでも守っていくことができるのだろうか。

自然がいつばいの紀の川。紀の川には約百五十種類ものたくさんの生物がすんでいるそうです。アユやハゼなどの魚類をはじめ、水辺のヨシやヤナギの群落、草むらや水中にくらすたくさんの昆虫類、川原では渡り鳥の姿も見られます。しかし、川のまわりに多くの人がすむようになり工場などができて産業が発達するようになったため、昔とくらべると川の水も汚れてきたと言われています。

川は、自然に水をきれいにする働きをもっています。でも、それは川に流れこむよごれた水がわずかであった時代のことです。川自身が水をきれいにする力にも限りがあります。水がよごれると自然の生物が少なくなり、また、いこいの場として親しまれている水辺はなくなってしまう。そして、そのよごれた水を飲み水として使わなければなりません。

川によごれのおもな原因は、食べ残しや食用油、洗剤などみんな家庭から出るよごれた水。川によごれの原因の約6割が日常生活から出る「生活排水」だということを知り、僕はとてもおどろきました。僕たちは毎日台所仕事や洗たく、風呂、トイレなどでたくさんのお水を流しています。川をよごさないためにみんなができることで最も身近なことは、家庭から出るよごれた水をできるだけ少なくすることだと僕は思います。自分ひとりくらいなら大丈夫という気持ちがあります。川をよごしてしまします。食器洗いの前に、油やよごれをふきとり、食べ残しは流さないように注意したり、洗剤は使いすぎ

ないよう適量に。米のとき汁は植木の水やりに利用するなど、日頃のちよつとした心づかいや工夫が川によごれを防ぎます。

みなさんは、魚がすめるくらいの水にもどすためにどのくらいきれいな水が必要なのかを考えてみたことはありませんか。ラーメン一ぱいの汁（二百ミリリットル）では、浴そう三・五は五分の水。牛乳コップ一ぱい（一八〇ミリリットル）では、浴そう九は五分の水。使ったあとの天ぷら油（五百ミリリットル）では、浴そう三百三十ぱい分の水がいるそうです。よごれた水を流さない。川にゴミを捨てない。毎日の生活の中で自分ができることからまず、実行していくことが大切だと僕は思います。

ひとりでも多くの人に川の大切さを考えてもらうこともとても必要なことだと僕は思います。毎年、地域の人たちと協力しながら行なわれている「紀の川クリーンキャンペーン」では、川の大切さを伝える「カップの紙芝居」や、川にすむ生物を観察して水質を調べる教室が開かれたりしています。また、大人も子供もいっしょに河川敷のゴミ拾いをするなど、「川をきれいにしよう」「川とのふれあいを深めよう」とさまざまな取り組みがされています。

川はみんなのいこいの場であり、遊びの場であり、自然を学ぶ場だと僕は思います。そして、僕たちのくらしになくはならない命の水です。これからずっと美しい川の流れを守っていくことが僕たちの大切な役目だと思います。

入選

「未来への願い」

岡山県 吉備中央町立加茂川中学校

三年 草地 明日美

「わあ、きれい。」

私は毎年家族で、近くの川に蛍を見に行きます。今年も川岸一面に、無数の小さな光がピカピカ輝いています。それは、まるで夜空の星に包まれているようでした。夢のような美しさに見とれていると、父が

「やつと昔の光を取り戻したな。」
と言いました。

「どういうこと？」

と聞いてみると、

「お父さんが子供の頃には蛍がたくさん飛んでいたんだけど、みんなが田んぼに農薬をまいたり洗剤を川に流したりしているうちに、ほとんどいなくなってしまうんだ。でも、地域の人が元の状態に戻そうと、強い農薬を使わなくしたり、川の清掃をしたりいろんな努力をして、今は昔と同じくらい蛍が増えている。」

と言いました。私はそれを聞いて、祖母が言っていたことを思い出しました。

昔は、祖母の家の近くにもたくさん蛍が飛んでいたのに、今では全く見られなくなってしまうということでした。私が住んでいるのは、周囲が山で囲まれていて、自然がたくさん残っている地域です。それなのに、この十数年で蛍がすめなくなるほど水が汚れてしまったということが信じられませんでした。兄が通っている学校の街の友達も、蛍を一度も見ることが無い人が多いそうです。私はそのことを知って、驚きと同時に悲しみが込み上げてきました。人間のせいで、何の罪も無い蛍の居場所が減っているということが、悲しくて仕方ありません。人間が奪ってしまったのだから、人間が取り戻さなくてはならないのは当然のことです。

蛍だけではありません。人間も住みにくくなっているのです。父や母が子供の時の夏の遊び場は川で、毎日川で泳いでいたそうです。その頃の川は、魚がたくさん泳いでいてとてもきれいだったのに、今では汚れていて魚もいなくな

っているし、泳ぐことも出来ません。

この状態を昔の様に戻すには、どうすれば良いのでしょうか。なぜ汚れるのでしょうか。考えていると、この間近所の高い山に登った時のことを思い出しました。何時間も登った山の山頂付近に、山岸から水が湧き出ている場所がありました。私は、その水を手ですくってみました。その水はとても冷たくて、透き通っていて、手の中でキラキラと輝いていました。一口飲んでみると、疲れた体と渴いたのどを一瞬でうるおしてくれる、今まで飲んだことが無いようなとてもおいしい水でした。父が、

「この水が川になるんだ。」

と言っていました。その水はともきれいだっただから、どこかに汚す原因があるのでしょうか。一人ひとりが気を付けていけば、汚れることは無いと思います。

人間は水を作り出すことはできません。だからこそ、自然が作り出した恵みを汚すことは許されません。水は、人間はもちろん、動物や植物、生命あるすべてのものに必要なものです。これ以上、人間が生物たちのすみかを消してはいけません。自分たちが自ら住みにくい環境を作り出さないで下さい。出来ることはたくさんあるはずですよ。私は、命の源である水を大切にしたいです。世界中のみんなが同じような気持ちを持てば、動物も人間ももつとすみやすくなることでしょう。私たちは「水の惑星」と呼ばれるこの地球に生まれたのだから、きれいなままの水を維持していかなければなりません。川の水が汚いことが普通になってはいけません。未来には、今よりもっときれいな水が残っていることを願います。

入選

「今、あなたに伝えたい」

福岡県 福岡教育大学附属久留米中学校

三年 江頭 史歩

私は今、立っている。

春の風に吹かれ、若草が揺れる。菜の花のほのかな香りが漂う。蜜蜂などの虫たちが嬉々として飛び回る。そんな美しい河川敷に、私は今、立っている。私のふたつの瞳には、太陽に照らされて煌然としている筑後川の堂々たる流れが映っている。鳥や鶴、雀などが羽ばたく、雲ひとつ無い空を映し出しながら川は、有明の海へと下る。

皆さんは、筑後川の事をどの位知っているのだろうか。

筑後川。長さ一四三キロメートル、流域面積二八六〇平方キロメートル。熊本、大分、福岡、佐賀の四県に跨り、利根川、吉野川と共に「日本三大暴れ川」と称されていた。また、「筑紫次郎」の別名をも持つ。

これ位の情報ならば、今の時代、インターネットを利用すれば、一秒とかからずに活字となって表示される。

それだけだろうか。本当にそれだけで「筑後川」を説明し終えてしまえるのだろうか。いや、それは無理だ。

ドーンドーン、ガタガタ。今日も重機の音が我が家に響する。重機が大きく動けば、家が揺れる。

家の隣で工事が始まったのは十年程前。まだ私が幼稚園の頃だ。幼い頃から見慣れた工事風景も、終わりに近づいてきた。最近では大きな水門が完成した。

私の家は、九州一の大河のすぐ側だ。家の周囲にもその支流が流れ、たくさんクリークが張り巡らされている。

祖母は私にこう話した。

昔、家の周辺は少し激しい雨が降れば、水田は冠水し、大雨ともなれば家のすぐ側まで川の水が押し寄せてきて、時には床下浸水する事もあった、と。

思えば、道路が冠水して、車が動かせず、仕事に行けなくなった事があった、と父も言う。

私に通っていた小学校には、水害に備え、救助の為の小さな船があり、廊下の天井に吊されていたのを不思議に思ったのも記憶に新しい。

祖父母がまだ幼かった昭和二十八年には、筑後川が決壊して、この辺り一帯は建物の一階の高さまで水が押し寄せる大洪水に見舞われたそうだ。

私が小さい頃より見慣れた筑後川とその支流は、米や野菜の栽培に必要な農業用水を供給してくれる。私たちの喉を潤してくれる。それだけではない。私たちが普段身につけている物、使用している物の製作過程にも筑後川の水が活用されているのだ。

そう、筑後川の水は、私たちに豊かな恵みをもたらす母なる川なのである。だが、時には洪水を起こし、多くの人の命や財産も奪う暴れ川にもなる。

しかし、私の記憶には暴れ川のような風景はない。今の筑後川は大きな堤防に守られ、洪水になる前に家の近くの水門から、筑後川に排水している為、洪水とは無縁である。

蛇口をひねれば無色透明で衛生的な水が流れ出る。それが普通だと思っはいないだろうか。忘れてはいないだろうか。それも筑後川のお陰だということ

を。

「筑後平野の百万の生活の幸を祈りながら川は下る」
かつて團伊玖磨が唄ったように、筑後川は今までも、そしてこれからもきっと、私たちの母なる川であるように。

私たちが共に生きる川、今、あなたに伝えたい。
本当に、ありがとう。

入選

「水への感謝」

福岡県 福岡教育大学附属久留米中学校

三年 深村 光

「水」とは何だろうか。普段何気なく使っている生活に必要な不可欠な水、命の源である水。数えるときりがない程、人と密接な関係にある水だがどれほどの意識を私達が水に対して持っているのだろうか。水は現在の生活にあつて当たり前という考え方。テレビで多くの水についての特集があつてもどこか他人事のように一線をひいてしまつて私がいる。

今の日本は豊かな水資源を所有している。蛇口を捻れば水が出る。喉が渴いたら何の苦労もなく水を飲む事ができるのだ。しかし実際には水道水を口にする事は少ない。ある時父とコンビニで飲み物を買つた。私はジュースを父は水を買つた。その際にボソツと父が

「もうお金で水を買う時代になつたんだな。」と天然水を飲みながら言つた。父が学生の頃の日本は、水を『買う』なんて事は信じられなかつたそう。しかし長い年月を重ねる中で、毎日少しずつ何かが変わつてきたのだろうか。阿蘇にある祖父母の家の近くには、水が湧き出す小川の始まりとなるほとりがある。そこには、地下から湧き出す水が滔々と流れている。川のせせらぎが聞こえ、クレソンやオオカナダモ等の水草が茂りキラキラと木々の木漏れ日に照らされ輝く澄んだ水がある。それは本当に心洗われ、水の豊かさと美しさを私に教えてくれる。水の湧く所に柄杓が一つ置いてあり、そつと水をすくつて飲む。生まれたばかりの冷たく新鮮な水の味は何にも表現できない程とても美味しいのだ。喉の渇きだけでなく心までも潤していく様に感じるのだ。小学生の私に祖父が言つたある言葉が蘇る。あの時は便利な毎日になれつこになつてしまつていて心にも止まらなかつた言葉。

「こういう自然が作る場所を私達は守らなければならないのだよ。」

「この水の、瑞々しさが失われぬ様にな。」

という言葉だ。この意味が、今少しずつ私の中に響いてきている。祖父の伝えなかつた事が何かわかり始めている。美しい水は限りある資源である事。そし

て、どの様にして守っていくのかが大切で、私達の日々の在り方に繋がつていくという事が見え始めた。世界中を見渡せば、水の問題はすでにあちらこちらで生まれているのだ。私はこの現状を見ようとしない、気づこうとしていなかっただけなのだ。

世界に目を向ければ、渴水の辛さに堪え汚れた泥水でさえも愛しみ生活している人々が大勢いるのだ。「水」というものに変わりはないのにその中で安全性だつたり、美味しさだつたり、量の違いだつたり・・・大きな違いが存在している事実。水の清潔さと美味しさをかう時代を受け入れた私達は毎日の水に汚染の危機は感じていても、水の汚染をストップさせる活動や今、存在する水資源を慈しむ心や感謝の念をはたして抱いて生活しているだろうかと今一度自分に問うてみた。水の豊かな国に住み、世界各地の水を消費する。そんな私達が大切な事を忘れかけている気がした。貧しい国の人々が洗濯、トイレ、お風呂・・・生活に必要な水汲みに追われる毎日。何キロメートルもの道を歩き、僅かな水を汲む。そんな現状が自分に降りかかるなど、今の私達は想像していかないのではないだろうか。私達が水と共に生き、生かされている限りいつか水資源の限りに気づかされる時は必ず来るのだ。今、ペットボトルの天然水も美しい清流から汲み上げられ商品となつて現実。私達の日常の中に世界に見る渴水した川と同じ歩みを辿つてしまふ危険性を含んでいる。失つてその重大さに気づいていては遅い。私は、水を愛しみ大切に思う心を持つ事から始めたい。自分と水に一線を引かず親しみを持ち、自分の一部として大切にしたい。互いに未来を共有する事。それが重要なのだ。

入選

「棚田に映る空」

熊本県 熊本市立錦ヶ丘中学校
二年 中嶋 英華

「ママあー、お米届いたよー。」

袋を開けると、精米したての香りがふわあつと舞い上がった。三十kgもあるこのお米は、一ヶ月に一回、父の実家から送られてくる。

父の実家は、宮崎県の高千穂という所にあり、専業農家をしている。父から、

「牛や蚕の飼育もしていたんだけど、二人共、歳をとって今は、野菜と米を栽培するので、精一杯なんだよ。」と聞いた。

「ねえ、手伝いに行かない？」

私が、父の顔を覗き込みながら言うと、父は一瞬驚いたような顔をして、

「じゃ、ゴールデンウィークに、行こう。」と嬉しそうに笑った。

実をいうと、私は高千穂の田んぼを見たことがなかったので、内心ドキドキしていた。

ゴールデンウィーク初日、真っ青な空がとても気持ち良かった。二時間以上走り、木々が生い茂って底の見えない谷をこえた。曲がりくねった道は段々細くなっていく。切り立った崖の上に祖父母の家はある。そこに到着すると、私はすぐに車から降りた。胸いっぱい空気をすいこんで、伸びをすると、ウグイスが鳴いた。私の住む所ではほとんど聞けないので、それだけでも特別な気持ちになった。

その日のうちに、祖父母の畑や田んぼを見に行つた。田んぼは不思議な形をしていた。山の斜面に階段のような田んぼが不規則に並んでいるのだ。祖母が、「これは棚田というんだよ。」と教えてくれた。棚田はそれぞれ、二mほどの段差があり、その斜面には、細い用水路が作られていて、水が勢いよく流れ落ち

「触つてごらん。」

「えっ、汚くないとお？」

「大丈夫。きれいだから。」

少し不安になりながらも、水に手を浸してみると、ひんやりと冷たかった。

その細い用水路は、山のとっぺんから続く棚田全てにつながっている。ところどころにある水溜の中には、おたまじゃくしが泳いでいた。

棚田は、雨が降り、一気に流れて崖崩れがおこることを防ぐための、ダムとしての作用もある。

また、用水路の水はどの田んぼにも平等に上から下へ行き渡るようになっていく。それぞれの田んぼの用水路についている水門を開け閉めすることで、水という資源をギリギリまで利用できる仕組みとなっている。

山の水は、田んぼだけで使われるわけではなく、村民の生活用水としても利用されている。そこで、水を共有するという、素晴らしい節水方法にたどりついたのだと思う。

私達は、個人で水の無駄遣いを減らすことばかり考えがちだ。しかし、高千穂では昔から、不足しがちな水をいかに有効に利用できるか工夫をこらしてきた。

私の暮らす熊本では、水が豊かで大切な資源だということを忘れてしまいそうになる。けれども、高千穂では、水は生きる糧であり、生活に、より密接している。

私は、「山で農業を営む人々は、自然と共生し、自然の恵みを共有している」ということを学んだ。

それは、私これから生きていく上でも、大切なことだと思う。なぜなら、私も自然と共に生きていて、人と、その恵みを分け合っていかなければならぬからだ。

五月下旬、いよいよ水門は開かれる。六月には、田んぼは更に雨で潤い満たされることである。私は梅雨明けの空が田んぼ一面に映るその風景を、棚田のてっぺんから眺めたい。

入選

「熊本の水」

熊本県 熊本市立三和中学校
三年 高木 精華

「いただきます。」

「ご飯にみそ汁と納豆、ほうれん草にブロッコリーなどなど、今日の朝食にも野菜がたくさん並んでいる。私は中学生になってから、この水の作文を書くために、毎年たくさんさんのことを調べてきた。「水の都・熊本」で採れる新鮮な野菜は、とてもおいしい。だから私の家でも野菜をたくさん食べるようになった気がする。「地産地消」給食の献立表でよく見る言葉が頭に浮かんだ。」

「いってきまーす。」

(さあ、今日も頑張らないと。でも、専門委員会は、ちょっと気が重い……) 私は今年の十一月に、念願の保健委員長になった。保健委員は常時活動が多く、毎日とても忙しい。今日の委員会では司会をしなくてはならない。前に出るのとても苦手だが、今年度最初の委員会だから、健康観察簿と水質検査について、説明することになっている。

水質検査は、保健委員が毎日行っている仕事だ。管理棟と北校舎、南校舎の三ヶ所で、水道水の塩素の量を調べている。しかし、なぜ毎日調べなくてはいけないのか、私はその理由を知らなかった。日によって、場所によって、塩素の数値が違う。これはなぜだろうか。私はこれらの疑問を保健の先生に尋ねてみることにした。『学校環境衛生管理マニュアル』初めて聞く言葉だった。水道水は、地下水を浄化して作られているが、病原性微生物を殺菌するために、塩素を添加して供給されている。だが、水槽に貯留している間に遊離残留塩素は少しずつ減少するのである。水槽の容量が大きく、滞留時間が長い場合や長時間使われなかった時などは遊離残留塩素が減少し、細菌が繁殖する危険もある。だから全校生徒の健康を守り、事故を未然に防ぐために飲料水の管理は学校が責任を持って行う必要があるということだ。そのために、私達保健委員は、日常的に残留塩素濃度の確認をしていたのだ。毎日行っている水質検査にそんな意味があったなんて全く知らなかった私は、とても驚いた。そして同時に、

「全校生徒の健康を守っている」という責任を感じた。

蛇口をひねれば、水は当たり前に出てくる。だから、このおいしい熊本の水は、私の中で当たり前になっていた。飲み水のほとんど全てを地下水でまかない、しかもその水はとても良質な、天然のミネラルウォーターだ。でもそれは、管理センターできちんと管理されていて、たくさんの人達の努力のおかげで、できたものだった。そして今、知らないうちに、私も学校の中で水を管理する立場になっていた。私達の学校では今、体育大会に向けて練習が始まった。水を飲もうと、水道には全学年の生徒が長い列を作る。全員の健康を守るため、私達保健委員は、水質検査を毎日きちんとやっていきたいと思う。

「ただいま。」

今日も長い一日が終わった。学校から帰るとホッとす。お腹も空いた。(今日のご飯は何だろう。)

熊本で採れたお米を、熊本のおいしい水で炊いたふっくらご飯。みずみずしい野菜がたくさん並んだ食卓。こんな当たり前の幸せが、ずっと続くように、この天然のミネラルウォーターを大切にしていかなければならない。私達一人ひとりが普段から節水に努めることは、小さなことかもしれないが、とても大切な事だと思う。私も保健委員会の活動を通して、呼びかけていきたいと思っている。

水に関わるたくさんの方々感謝しながら。

入選

「一輪の花の美しさに気づく心を」

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

二年 木下 憶斗

「せかいいちうつくしいぼくの村」

大好きな一冊の絵本が今僕の手にあります。この絵本の作者である小林豊さんは、世界各地を訪れ、現地の人と一緒に生活しそのときの体験をもとに絵本を創られています。昨年僕は小林さんと直接会ってお話を伺う機会に恵まれました。小林さんのお話はとても興味深く、考えさせられることも多くありました。

小林さんはアフガニスタンを訪れ、絵を描いていた時のことを話してくださいました。ある日、絵を描いていると、子どもたちが目を輝かせてそれを見つめていました。絵を描いてみたいのだろうと思ひ、紙と鉛筆を差し出すと、大事そうにそっとポケットに入れ、

「僕には弟がいるんだ。僕も弟もこんな見たことないから、持って帰ってみせてあげるんだ。」

無邪気な笑顔でそう答えたそうです。チョコレートあげたときも同じです。自分は食わずに兄弟に持って帰る子どもたち。この話を聞きながら、「僕だったら自分だけで食べてしまいたいさうだな。」と思ひました。そして、自分がいかに恵まれていてそれを当たり前と思ひ、分け合うことなど考えもしないでいることに気づかされたのです。

分け合う、という言葉が浮かんだとき、もう一つの話思い出してしまいました。アフガニスタンの方が日本に見えたときの小林さんの体験です。そのとき、次のような話をされたそうです。

「私たちの国では、遠くまで水を汲みに行きます。飲み水すら不自由をしています。でも、水は私たちだけのものではない。花を一つ咲かせるために、遠くから水を引き、水を欠かさないように、それはそれは気を遣って育てています。日本はいいですね。自然と雨が降り、木々が緑の葉を茂らせている。なんと羨ましいことだろう。」

僕は、アフガニスタンについて調べてみました。一九七九年から一九八九年にかけて起きたソビエトの侵攻によって、土地は荒れ果て、多くの国民が難民になり、六人に一人は五歳まで生きることができないこと、六〇パーセントの人は、安全な水を得ることができず、三分の一の家庭にはトイレがないことが分かりました。

僕は生まれたときから当たり前のように水を使ってきました。喉が渴けば蛇口をひねり水を飲み、毎日入浴し、トイレではふんだんに水を使い、いつも洗濯したてのきれいな服を着ています。近くには川があり、魚釣りも楽しめます。そんな僕にとつて、飲み水にすら困っている国がある、という事実は衝撃でした。僕たちが当たり前だと思っていることが、本当はとても幸せで、恵まれていることなのだと感じました。

しかし、それと同時に、「幸せを幸せと気づけない僕たち日本人は、本当に幸せと言えるのだろうか？」という疑問が頭をよぎりました。緑があつて当たり前、花が咲いていて当たり前僕たちに比べ、飲み水にも事欠きながら、苦労して水路を造り、少ない水を分け合い、一輪の花が咲いたときに感動し、喜びを感じることもできる人たちがいる。僕たちは恵まれすぎていて、水を分け合つて育てた一輪の花の美しさを見過こしてはいないでしょうか。そして、いつの間にか、きれいな水を汚すことにすら何も感じない鈍感な人間になっているのではないのでしょうか。

水はそこにあつて当たり前前のもではなく、ましてや人間が使い放題、汚し放題にしてよいものではない、分け合い、大切にすべき命の源なのだ、と思ひます。誰もがその心をもてば、きっと苦労して咲いた一輪の花の美しさには気づくことができるのではないのでしょうか。

入選

「豊かな水に恵まれて」

鹿児島県 鹿児島市立和田中学校

一年 竹岡 史子

先日、宇宙飛行士の山崎直子さんが、スペースシャトルで宇宙に飛びたった。その光景をニュースで見ながら、私はふと考えた。宇宙には水が無いそうだが、国際宇宙ステーションでは、どうやって水を確保しているのだろうか。

私の家の近くの慈眼寺公園には、「酒水の井戸」と呼ばれる湧き水がある。そこに私は、家族とよく水を汲みに行き、その水を沸かして麦茶を飲む。しかし二リットル入りのペットボトルに水を汲んでも、四人家族の我が家では、一人コップ二杯ほどしか飲めない。だが、インターネットで調べると、宇宙に五百ミリリットルの真水を持って行くのに、一万ドル、日本円にして約百万円かかるそう。そうすると、わずかに二リットルの水でも四百万円かかることになる。何人も人が長期滞在する宇宙ステーションの水を全部地球から真水で持つて行くとすれば、その費用は莫大なものとなる。そこでNASAは、水をリサイクルするシステムを作り出した。宇宙ステーションには、シャワー、歯みがき、ひげそり、手洗いで出る排水、それに尿までもろ過して再利用する水循環システムがある。それによつて、真水の不足を克服しているのだ。

ところで、水不足と言え、以前両親に断水の話聞いたことがある。姉が赤ちゃんの時、鹿児島が水害に見舞われ、浄水場が被害を受けたため、その頃住んでいた所では数日の間水が出なくなった。その間は給水車が来てくれたものの、姉をだっこしてポリタンクに入った水を運ぶのは大変で、水の大切さをひしひしと感じたそう。

ではもしまた災害で、水道の蛇口から水が出なくなったらどうしようと考えた時、思い当たる事があった。私の通学路に「応急給水拠点・和田水源地」と書かれた場所がある。それが何なのか、水道局の広報紙を見て調べた。すると、「応急給水拠点」とは災害時に住民へ応急給水をしてくれる場所だと分かった。さらによく見ると、そのすぐ近くにもう一つ、「慈眼寺ポンプ所」という「応急給水拠点」がある事も分かった。「応急給水拠点」が私の家の近くに二ヶ所あ

つても心強く、恵まれていると思う。

けれど、私にとって何よりも水の恵みが感じられるのは、やはり慈眼寺公園だ。「酒水の井戸」の近くには木々が茂り、石でできた橋にはこけが生えている。湿気があり、そのおかげで夏の暑い日でもひんやりしていて、とても過ごしやすい。井戸のそばに立つ看板によれば、水質が良いために千七百年代から酒造にも用いられていたという長い歴史もあるそう。そして今もなお多くの人がこの水を汲みに来る。私もよく飲むがとてもまろやかでおいしい。長い間沢山の人が親しんできたこの井戸が、私は好きだ。

宇宙ステーションの水循環システムも素晴らしいが、こんなに豊かに水の湧く地球の水循環も本当にすばらしいと思う。地球では、海があつて、水が蒸発して、雨雲ができて、雨が降つて、水が湧く。見事なバランスが保たれている。このバランスがくずれる事のない様に、私も日頃から、水のむだ使いをしたり水を汚したりしないように気をつけたい。食事の後のお皿の油污れをふきとるという小さなことでも、できることから実践していきたい。

世界には、日常的に水の不足している所も沢山あるというのに、「酒水の井戸」は長い間涸れる事なく湧き続けてきた。昔、酒屋伸介という人が、大切なこの井戸のために私財を投じて石畳に整備したのだそう。井戸のありがたさのありがたさを、昔の人は今の私達よりずっと強く感じていたのだろう。この豊かな湧き水をみんながいつまでもおいしく飲んでいける様に、私達の手で守っていききたい。

入選

「世界報の水」

沖縄県 石垣市立大浜中学校

二年 砂川 美穂

世界報の水。この沖繩には、水を大切にすることを表す言葉があります。それは、天からの恵みの雨を大切に無駄なく使い、水に感謝する意味がこめられた言葉です。みなさんは聞いたことありますか。

蛇口をひねればすぐに出てくる水。昔のように雨水をためなくても、いつでもある水。それがあたり前になっている今の私達は生活の不自由など感じたことはありません。

ダムもなく生活用水を確保することが大変だった時代、各家庭ではタンクを作り、雨水をためたそうです。また、井戸水をくみ、水を大切に使用してました。その雨水を天からの恵みだと大切に使用していたものこそ、「世界報の水」なのです。

今は、大きなダムがあちらこちらに建設され、一度に雨水を溜める事が出来、水不足で断水する事は少なくなりました。私たちが昔の人々の苦労など知る機会は、なくなりましたが水のありがたさ、大切さを知っていかなければいけないと私は思います。

数年前、大型台風が石垣島をおそい、電柱が倒れ、電気が止まり、ダムの水をくみ上げるポンプが電気で作動している為、水がくみ上げられず、各家庭への給水ができない状態となりました。その時初めて、蛇口をひねっても出てこない水に、とても不便さを感じ、水の大切さを思いしらされました。その為、約一週間、私達の住む地域には、タンクローリー車が定期的にまわって来て、各家庭からはポリタンクやバケツを持って、水を確保するためにみんなが並び、帰りには確保した水を一滴もこぼすまいと、慎重にゆつくりと家まで運びました。こんな姿を初めて目にした私は、「水は、生活にかかせないとっても大事なものの」だと強く感じ、水のありがたさを知った瞬間でもありました。

その与えられた大切な水で、手を洗う、顔を洗う、歯を磨く。実際に少しの水でこのような事が出来るのです。それを蛇口をひねり、水を出しっぱなしに

していた私は、これこそ大切な「世界報の水」を、今までいかにむだにしていたか実感しました。

今、私の卒業した大浜小学校ではミャンマーの人々に井戸を作ってあげようと、毎年、学校内で募金活動をしています。そのミャンマーには、近くに水がない為、6 km先まで生活に必要な水をくみに行っているそうです。その現状を知り、私は驚きました。手の届く所に水がある生活をしている私たちには想像もつかないことだからです。しかし、水が大切だと知っているからこそ、募金活動を始め、今でもその活動は後輩たちに受けつがれ、続いているのだと思います。

この世界には、私達のように水が蛇口からすぐに出てくる国もあれば、何 kmも歩き、生活用水を自力で確保しなければいけない国もたくさんあります。毎日の生活に欠かせない生活用水。そして生きていく為の農作物への農業用水。水は人々が生きていくうえで、とても大事なものです。まさしく「世界報の水」は天からの恵みなのです。私達の生活にとってかかせない水。それをあたり前と思わず、一人一人が感謝し、大切に使うことが大切です。

入選

「水を守り、島を守る」

沖縄県 宮古島市立城辺中学校

三年 下地 まどか

私の住む宮古島は沖縄本島からさらに二九〇kmも離れた南の方にあります。小さな島ですが、沖縄県の耕地面積の四分の一がこの島にあり、県内最大とも言われる農業地域となっています。

その農業生産のために使う水も、私たちが飲んでいる水も、すべて宮古島で「地下水」によって支えられています。

山も川もなく平べったい地形で石灰岩の島と言われる宮古島で、生きていくために必要な水を確保することは、昔からとても重要な課題でした。雨の少ない日が続くとすぐ干ばつとなり、水不足に悩む過酷な日々が何回も繰り返されていました。

「こんなダラダラした踊り方では、雨はふってこないぞ！もっと、真剣に踊りなさい！！」

地域の公民館長さんの声が、私たち城辺中学校の体育館内に響きわたりました。中学生に「クイチャー」という、地域に昔から伝わってきた踊りを教えるための授業に来てくださったのです。昔の人々は、天に向かって跳び上がるように「クイチャー」を踊り、雨が降ることをひたすら願っていたのです。

この島には「水を求めて」の厳しい歴史があったのだと思いました。

宮古島では、雨水の40%は地面を流れて海へ行きます。これまで海へ流されていた水が地下ダムに貯められるようになり、今では農業用水として利用できるようになりました。そのおかげで現在では、安定した農業経営ができるようになっていきます。島の農業にとって不利と言われていた自然条件を克服して、「水」を得たいという島民の願いと技術の進歩によって地下ダムが建設されました。多大な費用と長い年月がかけられています。島の中で「水」を確保するための努力の歴史を、ここでも見ることが出来ます。

百パーセント、地下水に頼っている私たち宮古島の住民は、その地下水が汚染されてしまったら、いったいどうなってしまうのでしょうか。

私たちは、実際に自分たちで水質調査にチャレンジしてみることになりました。自分たちの住んでいる城辺に昔からある湧き水「ムイガー」「ヌグスクガー」「友利あま井」の場所です。水のおいや色、にごり、水の深さ、流れの様子という項目ごとに比較してみました。今ではもう、ゴミなどが落ちていて、少し汚染されていることが感じられる場所もありました。その水が飲めるかどうかという安全性などについては、もっと専門的な知識が必要だと思いました。

さまざまな報道や情報によると、今、宮古島の地下水は危機的な状況にあると言われています。島全体に降りそそぐ雨が地下水となるため、地上で生活している私たち住民の暮らし方が、そのまま地下水の汚染につながっていくことなのです。

水は循環しています。生命のつながりと同じようにこの地球上を形を変えて回っています。その自然のかけがえのない恵みとしてある「地下水」が、汚染の危機にあるということは、島に住んでいる私たちの責任です。私たちが使っている物が雨水と共に流れ、地下に染み込んで水質を変化させていき、それが私たちの飲み水に黄信号を送っているとのことなのです。技術革新によって私たちの生活は快適で便利なものになりました。しかし、目の前に見える利益や便利さを求める生活は、自然と共に生きていこうとする優しい心をつい忘れさせ、大切なものを見失わせてしまう危険性も持っています。

島の豊かな自然を未来へつないでいくために、島で生きる私たち一人ひとりが、地下水をとりまいている環境を優しいまなざしで見つめていく生活。その心が、水を守り島を守る行動へつながっていくのだと思います。

入選

「世界の水」

ロシア モスクワ日本人学校

一年 山下 友萌

日本にいる人は水道水を飲む人もいます。水道の水を飲むのは一般的でないとしても、水道の水で野菜を洗ったり、冷凍していたものを溶かしたりはすると思います。しかし、世界の国々の中で水道水がきれいな国は、あまりないのです。だから自分では気付かなくても、私たちは恵まれていると言えるでしょう。

たとえば、ロシア。ロシアの水は、水道水の水を飲むと、お腹をこわす人もいます。ロシアにいる日本人は、大半の人が浄水器に水を通していません。なので、ロシアの飲み水は日本より値段が高く、日本では百円の物が、ロシアでは百五十〜二百円程します。

私のロシアの家では、野菜を洗うのは水を浄水器に通した水、料理の中に入れるのは買った水を使っています。

日本にいるときは飲み水も野菜を洗う水も浄水器に通していました。今なら日本に帰っても、平気で水道水を飲めると思います。

それでも水を安心して使うには、たくさんの方の協力が必要なのです。それは、ダムを造る人水を送る人、水をきれいに保つ人、ダムがある町や村の人協力があつて初めて、私達は安心して水を飲めるのです。しかし、浄水場の乏しい国では、わずかに、それも遠くにしか水がなく、毎朝に子供が水を取りに行くそうです。また、ある村では、わずかにしかない水、それも茶色くにごった水を大切に使っているのだそうです。そんな人達から見れば、私達の水の使い方、無駄遣いと思えないでしょう。

みなさんは、もしも湯水が起きたら、と考えたことはありませんか。もし湯水が起きれば、水が不足し、家や学校で水が使えません。ご飯も作れなくなり、お風呂や洗濯や水洗トイレも使えなくなります。私達は、水がなければ、約一週間程度しか生きられません。しかし、水さえあれば、二週間程度は生きられると言われています。

私達は、体の中の水分が大体六十から八十パーセントもあります。そしてトマトは九十パーセント、リンゴは八十五パーセント、梨は九十パーセント、魚は七十五パーセント、クラゲなどは九十六パーセントが水です。

人間の体の部分で言うと、血液の九十パーセントが水、脳も八十パーセントが水、そして、物を見るための網膜も九十二パーセントが水で、人は水に写してものを見ていることになりません。ですから、人も木も果物も動物も、生きているもの全ては水に深く感謝し、水を大切に使用しなければいけないのです。

特に私達人間は、必要以上に水を使っていると思います。ですから、私達は、水を無駄遣いしないように気をつけましょう。そして、地球の命とも言える海の水は、私達にとって、最大の宝であることを忘れないでください。

入選

「南国タイが教えてくれたもの」

タイ

バンコク日本人学校

二年 山野 滉太

蛇口から出る水はきれいで安全、トイレで水がしつかりと流れる、シャワーの水は濁りのない水が出る、これらのことをみなさんの中に少なからず「当たり前前」と思っているだろう。だから普段水に困ることもない。しかしその反面、水のことを考えることもなくなっているはいないだろうか。

僕も少し前までは同じ思いでいた、だが今僕が住んでいるタイと言う国に来て少しづついろんなことが見えてきた。

まず初めてタイに来たとき一番驚いたのは、水道水が飲めないということだった。今まで当たり前のように飲んできた水が飲めないと知り、とても不便に感じた。特にここは南国の国、そのため家には浄水機があり、飲料水が何十本も置いてある。またトイレの水がちゃんと出ず止まったり、シャワーの水も数日使わないと茶色く濁ったりしてしまう。機会のない人にとっては「えっ」と思うかもしれないが、世界にはこのような国がタイ以外にもたくさんある。

日本は水を大切にするとよく耳にするが本当にそうだろうか。僕は一度タイにある、ある灌漑施設に行ったことがある。そこで農家おばあさんが言っていた。「この国では乾期に水がないと、お米や野菜が育たないから、水はとても大切なんだよ。」この農家の人は乾期には施設によって川から水運んでもらっておいしい食物を作っている。僕の住んでいる家の近くには、チャオプラヤーという長い川が流れている。この川のおかげでたくさんのお田畑が潤されている。水は飲んだり、料理をしたり、人間が生きていくうえでかかせないが、それは植物や牛や豚のような動物たちも同じであって、自分の食卓に並べられている全ての食べ物も、水あつてのものなのである。

タイに来て、日本のころはどれだけ贅沢していたのだろうと思うようになったが、最近はまだ自分は贅沢している気がしている。現地の人の中でも首都バンコクを離れると生活が一気変わる。そこでは平均一日100Lの水しか使

わない。日本では250〜300Lと言うから差は歴然としている。聞くところでは洗いや物の時、水を出したまま流す人がいると言うが、そんなことは考えられないと言う。改めてタイ、そして自分と日本の水に対する意識の違いを思い知らされた。

ソンクランと言うタイの水の祭りを知っているだろうか。昔から行われており、仏教のお清めとして行われている。水は大切なものでもあり神聖なものもあるのだ。

では今の僕たちに何ができるのだろうか。最近僕は、身の回りのほんの小さな「無駄使い」に気がつけばすぐに節水するようにしている。それは一人として見たら、小さなペットボトル一本分にも満たないかもしれない。けれどみんなが一人一人自分の周りのちよつとしたことに気がついてくれば、たくさん水の無駄使いがなくなるに違いない。

タイに来て僕は本当に水の大切さを教えてもらった。チャオプラヤーの流れで自分は今生活している。だからこそ、この国に、この世界に、そしてこの水になにか恩返しをしなければならぬ。

大切なものは、そういう思いだと思う。残念ながら先進国では水の無駄使いが多いということは否定できない。便利さのあまり人は大きなものを見失っていると思う。一人でも多くの人がそのことに気付けることがこの先の問題である。

この青い水の惑星の未来に、そして未来の人々にも水のすばらしさ、おいしさ、そして大切さを伝えるためにもきれいな水を残していきたい。そしていままでの人生に、水に対して感謝し、言いたい。

「ありがとう。」